# ドラゴンハンター

サトシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンハンター

【Ｎコード】
Ｎ８２６５Ｔ

【作者名】
サトシ

【あらすじ】
ＶＲＭＭＯＲＰＧの最新クエストをクリアした後、突如、異世界へ転移。しかも、規格外すぎる強大なドラゴンが現れ…。

## プロローグ（前書き）

初心者です。温かい目で読んでください。お願いします。

# プロローグ

厚い暗雲。轟く雷鳴。響く咆哮。

大気が激しく振動し、身体が震え、　汗が頬をつたう。

ヤバい、ヤバすぎる！！

転がるリアルな死体を一瞥し、俺は頭上の富士山すら凌駕する巨大な黒龍に視線を戻す。

全身を隈無く覆う厚い鱗が、稲光で不気味にキラキラと輝いている。

「見て、見て、浩輝。胸、揺れてる、揺れてる！！」

黒龍を切りつけながら、巨体の上を縦横無尽に飛び回る巨乳の美女。緊張感なく楽しそうに、俺に叫びかけるこの美女、名前はアリア・スカーレット。だが、中身は男で、本名は椿健太郎。俺とは、幼馴染みだ。

「バカ、危ねぇぞ！！　お前、現状わかってるのか！？」

俺の叫びが聞こえなかったのか、無視したのか、奴は麗しい奇声をあげながら黒龍の上を跳び跳ねるのをやめない。

「チッ」と舌打ちをする俺は、黒龍の視線に気づき大量の魔力を放出して「浮遊」の魔法でその場を離れる。直後、俺の立っていた地面に半径５０ｍほどのドス黒い巨大な火球が炸裂。

アツい！！

何百キロも離れたのに、熱風がチリチリと俺の背中を焦がした。半端ない威力だ。顔をしかめながら振り返ると、地面に巨大なクレーターが出現していた。その近くでは、逃げ遅れた者の死体が転がっていた。半身が融解し、目も当てられないほど無惨な姿へと変貌している。からだの組織一つ残さず死んだ者もいるかもしれない。

最悪だ。マジでシャレにならねぇ。

１ヶ月ほど前にサービスを開始した最新のＶＲＭＭ　ＯＲＰＧゲーム、ドラゴンハンター。

タイトル通り、ドラゴン討伐を目的としたＲＰＧであるが、ドラゴン以外にも多種多様なモンスターが登場する。

このゲームは討伐で得たポイントをステータスに割り振り、ジョブの熟練度や習得クエストでスキルを覚えるという仕様で、レベルの概念はない。そのためか、職業が無数に存在する。例えば、ひとえに武道家と括れるようなジョブでも、空手、ボクシング、柔道などと細分化されているのだ。

俺は魔法をメインに遠距離攻撃に特化したジョブばかりマスターさせ、ステータスもそれにあわせて、魔力や射的力などを特に成長させた。更に現在、前衛職の忍者についているため、機動力も若干上昇している。忍者、後衛職の欠点である体力（ＨＰ）、防御力の

低さも、討伐で入手したアイテムや強化魔法で補えるので、並の前衛よりも前衛らしく達振る舞える魔法使いを完成させた。

ちなみに、ステータスも、体力、魔力、物理攻撃力、物理防御力、魔法攻撃力、魔法防御力、魔法耐性力、射的力、投力、機動力、収得力と細かくわけられている。

この中で特に勘違いしやすいのが魔法耐性力で、これをあげると状態異常になりにくくなり、回復魔法が効きづらくなると思っている人が多い。実際のところ、回復魔法の効きはよくなるのだ。

そして、収得力。これも忘れてはならない。これは、レアアイテムやスキルの獲得を割り増しさせる非常に便利なものだ。これに関しても、ないがしろにし、損をしている者が多い。

このゲームは、けっこう不親切でそういう説明がなく、魔法も使ってみないと効力がわからない。そのため、苦情を言う者も多いが、効果がわからないという面が好奇心を刺激するのか、むしろ歓喜している者のほうが多いらしい。正直、喜んでいる奴らの気がしれない。

まぁ、そんな仕様なので、強さがレベルという数値で見えないし、わかりづらいため、バカな奴らが自分の強さをはかり違えて難関な討伐クエストに参加したりしている。そのため数十人で挑んだのに、最終的に討伐成功したときは、数人しか生き残っていないという現象が多発している。

現実とまったく同じで動けることが魅力的で、ほとんどのプレイヤーが後衛より刺激的な前衛職を選択していることも、これを助長している。このゲームにおいて、強さとはプレイヤーの技量に左右

される。どんくさい奴が前衛をしても、うまく立ち回れずに、足手まといになるだけだ。現実のほうで、運動神経がいい奴ほど前衛に向いている。豚に真珠、猫に小判。いくらステータスが高くても、敵の攻撃を避けきれなかったら、意味がないからな。俺はその辺を見越して後衛についたんだ。後衛は前衛と違って、強力な攻撃ができるし、あまり動き廻らなくていいぶん操作も簡単だからな。そのぶん、防御面が心もとないステータスにならざるをえなくなるが…。

しかし、俺は大丈夫だ。さっきも述べたが、アイテムと強化魔法があるからな。俺は収得力もしっかり上昇させたため、他のプレイヤーよりもレアなアイテムを所持しているのだ。

その収得力の恩恵で得たドロップ品だが、まず、「忍耐の指輪」。これは、ダメージを9割減少させ、物理・魔法攻撃力、体力を半減させる。デメリットも大きいが、問題ない。他のアイテムがある。

「飛躍のベルト」。これは強化魔法の効力を5倍にさせる。持続時間も5倍であるから驚異的で、デメリットがないのが嬉しい。これのおかげで半減された攻撃力も覆り、「忍耐の指輪」と相まって鉄の防御力を誇り、低い体力も特に気にならない。

「温存のコート」。魔力消費を8割減、魔法攻撃力を2割減少させるアイテムだが、魔法攻撃力に関しては、「庇護のベルト」による強化魔法でどうにでもできるし、我が愛剣「魔銃剣」により屁でもない。

「魔銃剣」。剣の柄に引き金が、鍔に銃口が備わっている武器である。この剣に魔力を流してトリガーを引けば魔法が発動するため、長ったらしい呪文を詠唱する必要がなくなり、更に連射も可能だ。しかも、弾が不要で、どんなに強力な魔法だろうと制限なしだ。更

に魔法の規模も魔力を上乗せすることにより、増幅が可能である。よって、「温存のコート」の効果で、本来より少ない魔力で発動させた強力な攻撃魔法を、魔力の上乗せと強化魔法で威力を数倍に上昇させ、連射するという戦い方ができるのだ。

これらのアイテムを手に入れたため、俺は前衛職の忍者にジョブチェンジしたのだ。後衛から前衛にジョブチェンジした時に起きる、パラメーターの大幅な改正も、戦闘に差し支えないからな。まぁ、後衛一筋でもよかったのだが、せっかく「魔銃剣」という剣を持っているのだから、前線で存分に振るいたいだろう？

前衛職から忍者を選んだのは、忍術が使えるからだ。忍術の発動も魔力によるものであり、前衛の中で魔力などの補正が一番少なかったのだ。

ちなみに現在の俺のステータスだが、無装備状態で体力、１１６。魔力、２５４。物理攻撃力、１９９。魔法攻撃力、３９２。物理防御力、１０９。魔法防御力、１０７。魔法耐性力、１３５。射的力、３１１。投力、１２５。機動力、１８０。収得力、２１１である。

転職前は、魔力、魔法攻撃力、すべて４００を越えていたのだが、まぁ、それでも他よりは高い数値だから良しとしよう。その代わり、二桁だった体力などが上昇し、初期値の１０のままだった物理攻撃力が凄まじく上昇した。それでも数値だけなら中の下の前衛にも劣る。しかも、魔法攻撃力もあまり高くなく、上の下の後衛並みだ。

まぁ、そんなパラメーターだが、最強といっても過言ではない強さを誇っている。が、残念ながらトップではない。俺が言うのも変だが、チートな相棒が…。

# プロローグ（後書き）

設定に懲りすぎた気が…。

「**アリア・スカーレット**」

冒頭から遡ること十分前。

巨大なワニが咆哮し、戦車のような巨体をものともせず跳躍した。そのまま凄まじい速度で俺に接近し、大人を五人は軽く丸飲みできそうな大きく開かれた口が眼前に迫る。その威圧感、たとえると、暴走したダンンプカーがためらうことなく、まっすぐ自分のほうへ突っ込んでくるような、そんな迫力だ。

瞬間移動したように現れた大きな口に俺の全身はすっぽり覆われてしまったが、口が閉じられる寸前になんとか身を翻し、口の隙間から空中へダイブ。その刹那、「ガチイィィ！！」と歯と歯が噛み合わされる凄まじい音が鳴り響き、怖気が全身を襲う。俺は中空でワニの側頭部を蹴りつけ、その反動で退避しながら、更に「浮遊」の魔法で一気に距離をとる。

なんつぅスピードだ。さすが、最新ダンジョンのボスだ。

体長２０ｍほどの恐竜のような巨大すぎるワニ。最近では珍しい、ドラゴン以外のボスモンスターだ。ドラゴンと比べると、小さめだが、その動き、ドラゴンよりも俊敏である。

俺は額の冷や汗を拭いながら、体勢を立て直す。距離がずいぶんと離れていたから油断した。前衛にまだ慣れていないから反応が遅れたし、回避行動に移るのも手間取った。ボス相手に、前衛として

戦うのはまだ無理そうだ。

俺は前線で闘うのを諦め、「稲妻」の魔法を乱射。ワニが凄まじい悲鳴をあげ、それに呼応し、頭上に表示されている体力ゲージも大幅に削られていく。一気にゲージの８割をも削ぎ落とし、俺が勝利を確信して頬を緩ませたその瞬間、上空から隕石が落下。激しい砂煙が巻き上がり、ワニの頭部が空中を舞う。ゲージのバーが完全に消滅し、ワニの頭部はポリゴンとなって割れ散り、光の粒子に変わり降り注いだ。

最悪だ。いいとこ取りだ。

砂塵の中から、細長い剣を優雅なしぐさで鞘に納めながら、美女が現れた。

キリっとした細長い眉をわずかにつり上げ、透き通っているように曇りのない大きな瞳を隠すように閉じ、弾力のありそうな淡い赤の唇の隙間から緊張を吐き出すように呼吸を漏らし、やや茶色がかかった長い黒髪を揺らしながら、　俺に歩み寄る。

「ビキニアーマー」で身を包み、首には「聖女のペンダント」をぶらさげている。更に、覇竜の鱗で作られた肘から下をすっぽり覆う腕防具、シャツを腰に巻いているような形状の前が開いた腰防具。迅竜の皮で作られたブーツを着用している。防具のすべてが黒であるため、唯一、青色であるペンダントが際立ち、自然と視線がペンダントに…豊満な胸に吸い寄せられる。それはまさに、エロカッコイイという言葉が似合う衣装である。

そこへ女の憂えげな表情が相まって、なんとも妖しい美しさを醸し出している。その上、光の粒子が雪のようにヒラヒラと降り注い

でいるため、彼女の美貌がいっそう引き立つ。その妖艶な美は、どこか神々しく、女神のように荘厳であり、彼女から感じられる精悍さが留まるところを知らない。

コイツ、カッコつけてやがる。

「お前、いい加減にしろよ」

一瞬見惚れてしまったことを不覚に思いながら、隕石の正体であるアリアに獲物を奪われたことへの憤りを吐き捨てた。ボスのトドメを刺すと、ボーナスポイントがもらえるので、俺が怒る理由もわかるだろう。

「アハハ、ゴメン、ゴメン」

大人びた端麗な顔が崩れ、子供のような笑みを見せる。全然反省の色が見えない。

「これでいったい何回めだと思ってるんだ。次やったら、もうお前とは組まないぞ」

「もう、そんなに怒んないでよ」

そう言って、プニプニと俺の頬をつつく。

クッ、ときどきコイツが男だと忘れそうになる。　本来なら、自分の姿が忠実に使用キャラとして反映されるので、性別を変え、まったくの別人になるなんてことはできないはずなのだ。いったいどうやったのか、かなり気になるところだが、椿は教えてくれない。更に、謎その二。どこで身につけた職業なのか、「ドラゴンハンター」

なるタイトルと同名の最強のジョブをマスターしている。

そして、「ドラゴンハンター」をマスターして手にいれたという「斬竜刀」という代物まで所持していやがる。見た目は脆そうな細長い剣だが、名前のとおり龍の硬い鱗をものともせずに軽々と斬れるそうだ。しかも、かなり軽いためすこぶる扱いやすいという。普通、竜のからだを両断するにはスキルを使わなければ、絶対に不可能なのだが、「斬竜刀」は軽々やってのけてしまうらしい。なんせこの武器、物理攻撃力プラス０の代わりにすべての攻撃にクリティカル補正が入るのだ。まさしく、規格外な武器。しかし、椿の強さは斬竜刀によるものじゃない。

無装備状態での椿のステータスは、体力、６５０。魔力、８８。物理攻撃力、７５１。魔法攻撃力、７５。物理防御力、５０７。魔法防御力、１１０。魔法耐性力、１７６。射的力、１３５。投力、１６２。機動力、２２７。収得力、１１９であり、合計の数字が３０００になるというふざけたパラメーターなのである。ベテランのプレイヤーがやっと２０００を越える数値というのを考えると、まさに常軌を逸している。更に、装備によりこれらの数値が跳ね上がるのだから、その異常な強さ、理解できるだろう？

椿の防具について説明しよう。まず、「ビキニアーマー」。「ビキニアーマー」とはビキニ水着の形状をしている鎧のことである。ドラクエ３の女戦士の衣装を思い出していただければ、どんなものかわかるだろう。これは椿の趣味で着用しているものであり、防具というより、衣服である。何の効果もなく、ステータスも上がらない。

「聖女のペンダント」。これは俺が与えたものだ。女専用のアクセサリーで、魔法防御力を５倍に上昇させる。

「覇竜の鎧」。これは本来、甲冑のようなものなのだが、椿は見た目を優先して、腕と腰にしか着用していないのだ。効果は物理攻撃力・防御力をプラス５００だ。しかし、腕と腰にしか装備していないので２００しか上昇しない。

「迅竜のブーツ」。膝下まで覆う丈のロングブーツで、機動力を３００上昇させる。

これらを装備した椿のステータスは…考えるだけで軽くめまいがする。まさしく、このゲーム最強の男、いや、女なのである。それにしても、リアルで出会ったら怖いほどの見た目と、筋力のギャップだ。艶かしい身体は、モデルのようであり、全然筋肉質でないのも不可解だ。アバターはステータスの数値に反映されて、肉体が変化するはずなのだ。謎その三だな。

謎その四。空白の一週間。先週から昨日まで椿と連絡がれなかったのだが、その一週間の間に、椿は「ドラゴンハンター」なる職、「斬竜刀」などの装備を手にしたのだ。しかも、先週までの椿のステータスの合計は２３００程度と他のベテランと大差なかったというのに、一週間だけで７００も上昇させたのだ。俺が廃人的にプレーして、１ヶ月でやっとステータスの合計が２１３９であることを考えると、異常すぎる。いったい何をしていたのか訊いても、曖昧にはぐらかすのみで、いっこうに教えてくれない。いったいどんなチートを働いたのだろう？

そして、最後。謎その五。ステータス補正が入るからといっても、おかしすぎるほどの華麗で俊敏な動き。プロのアスリート並みの無駄のない立ち回り、リアルで平凡な高校生であることを考えると、どうにも腑に落ちない…。

## 「アリア・スカーレット」（後書き）

椿の描写で話が逸れてしまった…。

## 転送（前書き）

ようやく、黒龍出現。

## 転送

話を戻そう。

ボーナスポイントを奪われ不機嫌な俺に甘い声で頬をつつきまくる椿。中身が男だとわかっていても、椿の…アリアの美貌と身体があまりにもあれで、俺の思考もちょいちょい変な方向に行きそうになり、「つつくな！」と声を荒らげ、椿の手を払いのけ、距離をとる。

「プッ。顔が真っ赤」

俺は椿のからかいを無視して、討伐で得たポイントをステータスに割り振り、アイテムを確認する。

「何かいいアイテムあった？」

俺がアイテムを確認していることに気づいたようだ。

「いや、これといって」

「ふ～ん。まぁ、最新クエのボスのくせに弱っちかったもんね」

「いや、俺たちが強くなりすぎたのさ」

「うわっ、何、そのセリフ！？キモい」

…コイツ、本当に男か？

「キモい」と言われ、内心ショックだったが、それが椿にばれるのは屈辱なので、椿に背を向け、街に転送されるのを待った。しかし、いっこうに転送が始まらない。

「おかしいな。転送が始まらないぞ」

「さっきのボスじゃなかったんじゃない？」

そんなはずはない。ダンジョンの奥にいたモンスターだ。ボスに違いないだろう。

「いや、そんなはずは…」

「ない」と続けようとしたその時、俺と椿の足元にそれぞれ青白い光を放つ魔方陣が現れた。

「ホラな。やっぱりさっきのワニがボスだったんだ。クエストクリアだ」

「ちぇっ、つまんないな」

椿の呟きが合図になったかのように光が強くなり、俺は目が眩むのを避けるため、まぶたを閉じた。次に目を開ければ、街の入り口の巨大な門の前さ。

しかし、

「なんだ？　どこだ、ここ？」

転移が終わったのを感じ目を開けると、眼前にあるのは見慣れた

拠点ではなく、殺風景な荒野であった。さらにそこには、うじゃうじゃとたくさんのプレイヤーがいた。ざっとみたところ、５０人はいやがる。皆一様にキョトンとしており、キョロキョロと辺りを見回している。

「どうなってるんだ？」

俺は誰に尋ねるでもなく呟いた。いつもなら俺が何か言えば、椿が普段の飄々とした調子で返答するのだが、いっこうに何も言ってこない。

「おい、椿。これ、どう思う？」

言いながら、後ろを振り向く。が、そこに椿の姿はなかった。
…マジかよ。

不意に心臓の鼓動が速くなる。俺は他のプレイヤーと同様にキョロキョロと辺りを窺った。ん？　少し離れたところに椿がいる。よかった。

「おい、椿！！」

叫び、椿のほうへ駆け寄る。そわそわと世話しなく周囲を見回していた椿も、俺に気づき、トコトコ走り出した。

「ねぇ、なんだろう？　なんなんだろう、これ？　新しい演出かな？」

椿は合流するやいなや、リアルとかけ離れた可憐な顔をきらめかせ捲し立てた。さすがだ。俺と違って、不安がるどころか、この状

況に歓喜していやがる。新しい演出ねぇ。そうかもしれないな。説明がないのが、このゲームのスタンスだから、十分にあり得る。要するに、さっきのワニはボスじゃなく、これからが本当のボス戦なのかもしれない。しかし、そう返事をすると、「ほら！やっぱりあのワニ、ボスじゃなかったじゃん！」などと椿がはしゃぎそうなので、

「俺が知るわけないだろう」

と、ぶっきらぼうに答えてやった。それにしても、いったいここはどこだろう。俺はマップウインドウを開いてみることに…。ん？開けないぞ。というか、メインメニューのウインドウすら開けない。おかしいなぁ。

轟音。

突如、鳴り響いた雷の音にビクッと身をすくめ、俺は空を見上げた。いつの間にか、快晴だったはずの空が、真っ黒な雲で隙間なく埋まっていた。

「ヒッ！！」

背後で小さな悲鳴が聞こえ、俺は声のほうへ振り向いた。

「なっ！！」

さっきまで何もいなかったはずなのに、俺の視線の先には、巨大な黒龍が鎮座していた。

「キター！！」

興奮が頂点に達した椿が、黒龍に向かって駆けていく。それから数秒後、遅れをとるまいと他の前衛たちも走り出した。俺は呆然と立ちつくしていた。まず、黒龍の桁違いなでかさに驚き、それから、スタートログが鳴らなかったことに気がつく。どういうことだ？それも演出なのか？

ゴウッ！！

鳴り響いた激しい風声に、俺の思考はピタリと止められた。

黒龍が自分に向かってくるプレイヤーたちを軽く右前足で撥ね飛ばし、普通ならそこでＨＰが０になればアバターは消滅するのだが、そうはならなかった。直撃したプレイヤーは肉塊に変わり、避けきらなかった運の悪い奴らの胴体や首や腕や足が吹き飛び、豪快に血と内臓をぶちまけながら、その場を動かなかった俺や後衛プレイヤーのところに、嵐のような勢いで降りかかったのである。そのときの業風と血肉の雨が肌に刺さる感覚、忘れられそうにない。

俺は事態が理解できずにしばし呆然とした。が、人々の呻き声、濃密な血の香り、リアルな死骸により、すぐに我に返った。けれど、身体は指先一つ動かなかった。

この惨劇に、まずパニックになったのが、前衛陣である。椿以外は、飛んでいった同胞の末路に身を震わせ、一斉に退却を始める。遅れをとるまいと競うように黒龍に向かっていたのが一変、今度は生き残ろうと死に物狂いで押し合い、他人を盾にし、走っているのである。そこに黒龍が容赦なく攻撃を加えるので、さらに混乱が大きくなる。恐怖の叫びと死の断末魔が響き渡り、それはもう無茶苦茶な状態だった。

俺はその光景を見つめることしかできず、身体は自然と震えていた。とてもゲームとは思えなかった。バカバカしいが、一つの憶測を否定することができなかった。仮想現実が本物の現実になったんだ！・！

## 転送（後書き）

次回、黒龍との死闘!！

……の予定。

# 一人（前書き）

カッコいいタイトルが思い浮かばなかった…。

…そして。

前衛はあっという間に椿以外全滅。しかも、生き残った椿の攻撃は黒龍に切り傷を作る程度。黒龍も一切意に返していない。

バカな！！　「斬竜刀」を使った椿の攻撃が切り傷程度ということは、黒龍の防御力は桁違い、というか、あまり考えたくない数値だ。そして、前衛をいとも容易く殺害したあの攻撃力。半端ないパラメーターだ。

黒龍は椿を乗せたまま空中へ飛翔し、稲妻の音に呼応するように激しく咆哮。　そして、自分の身体の上を跳ね回る椿を無視して、後衛陣をターゲットにしたのだ。

生き残った後衛は、俺を除いて5、6人しかいなかった。なんということだ！　まだ数分しか経っていないのに、何十人といた人間が死に絶えたのだ。しかも、強化魔法をかけていなかったとはいえ、ダメージ9割減の俺が熱風だけで背中をやけどしたのだ。規格外にもほどがあるだろっ！

どうする？　逃げるか？　いや…。

「椿！！　そこを離れろ！！　あの魔法を使う！！」

「待ってよ、浩輝！！　もうちょっと、遊ばせて！！」

…　ハァ？　なんだと！！

「ふざけるな！！どかないならお前ごと龍を殺すぞ！！」

「一瞬で殺しちゃったら、楽しくないじゃん！じっくりやろうよ！」

「そんな余裕ねぇんだよ！！」

　叫ぶと同時に、引き金を引く。「魔銃剣」の銃口から強烈な閃光を誇る光線が噴出。黒龍の胴体に炸裂し、黒龍の全身を覆い隠すほどの青白い光の球体に変化した。

　俺の放った魔法は、「科学者」のジョブをマスターして得た「創造」の能力で作ったオリジナルの魔法である。とにかく、「派手」をコンセプトに「稲妻」の魔法をメインにして、「爆裂魔法」や「灼熱魔法」などをいくつか合成して作り上げたものだ。普通に使えば、発動させるのにかなり時間がかかるが、「魔銃剣」のおかげで即座に使える。しかし、魔力を５０も消費してしまう大技である。過去、威力を確かめようと軽い気持ちで試し打ちしたのだが、当時、最強だったドラゴンを椿や他のプレイヤーもろとも呆気なく即死させてしまったほどの威力である。名前？　考えてないな。

「ひどいな、殺す気？」

　物音一つたてずに、椿が可憐な所作で俺の隣に着地した。

「ふん、お前が言うことを聞かないからだ　。巻き添えで死んでも自業自得だろ」

　そう返したが、椿を見捨てたわけではない。椿の身体能力なら充分避けられるはずと判断したから発動させたのだ。なんせ椿

を説得するのは面倒だし、そんな余裕がないからな。こちとら自分の身の安全を考えるだけで精一杯なんだ。

「ひどいな〜」

　呟きながら、大気を震わせる莫大な閃光の塊を見つめ、

「あ〜あ。久しぶりに楽しめると思ったのに」

「お前なぁ、よくそんな悠長なことが言えるなぁ」

「えっ？　何？　どういうこと？」

「まぁ、いい」

　呟き、「魔銃剣」を腰に納め、周囲を窺う。黒龍の火球をも凌ぐ、桁違いの質量の魔法を、生き残った後衛たちが呆然と見つめていた。まぁ、無理はない。規格外の破壊力…というかチートだからな。

　が、その圧倒的な破壊力も永遠ではない。次第に光が収束していく。

「…嘘だろう」

　黒龍は生きていた。鱗が剥がれ、血を流し、満身創痍というような姿になっているが、致命傷にはなっていないようだ。

「うわ、スゴいね。まだ生きてるよ」

椿が軽い口調で呟く。

冗談じゃない！　そこは、死んどくべきだろう！！

黒龍の頭上にＨＰバーが表示されていないから、あとどれだけ体力があるのかわからない。それさえわかれば、多少モチベーションが上がるのだが…。

ゴウッ！！

黒龍が今までにない迫力で咆哮。ヤバい。怒らせちまった。

「おまえら！！　魔力が切れるのを気にせず、魔法を乱射しろ！！」

俺は畏縮している後衛たちに叫び、魔法を放つ。残りのプイヤーも俺の言葉に返事を返し、魔法を乱射。これだけの人数が揃えば、ボスモンスターでさえ苦もなく倒せるのだが、正直、勝てる気がしない。

刹那、黒龍が消失。

「避けて！！」

椿が叫び、俺は事態を把握。トリガーを引き、魔法を解放。魔力の上乗せでジェット機並みの速度に達した「浮遊」を使って、後方へ飛翔した。

爆音に衝撃波。

振り返ると、凄まじい砂煙が舞い上がっていた。目を凝ら

してみると、俺のいた付近に黒龍が植物のように地面から隆起している。その前足の太い鋭利な爪の間に、元は後衛プレイヤーだったであろう骨や衣服などが混ざったひき肉が見える。

オエッ！！　もろに見ちまった…。

「浩輝！！　危ない！！」

その言葉に、俺は込み上げるものを飲み込み、慌てて全身をコーティングするように「防御結界」を多重発動。直後、左脇腹に衝撃。何が起きたのかもわからず吹き飛ばされ、地面に衝突。

「浩輝！！」

椿が俺の隣に着地し、俺の顔を覗き込む。

「大丈夫？」

「…イチオウな」

どうやら、黒龍の長大な尻尾によってハエのように叩き落とされたみたいだ。

椿に支えられながら、身体を軋ませ立ち上がる。マラソン大会で完走したように身体が重い。

「イッ！！」

脇腹に鋭い痛み。思わず、右手で押さえる。しっとりと掌が濡れる。衣服のため見ただけではわからないが、どうやら出血し

ているようだ。濡れた右手を見つめ、それを確認する。

痛みも出血も、このゲームでは再現されないはずだ。やはり、もうゲームではないのだろう。

クソタレ！！　異世界転移した直後に戦うような敵じゃないだろ。めったに使わない奥の手である防御魔法まで使ったんだぞ！　通常に使用しても魔力を２０消費する防御魔法を幾重にも展開したのに…。俺の絶対防御が破られる日が来るとは、夢にも思わなかった。俺のチート性能が、この程度しか役に立たないなんて…。なんて恐ろしいトカゲだ。

「浩輝、本当に大丈夫なの？」

「あぁ。だが、ちょっと休ませろ」

今度は「創造」で「鎮痛」の魔法を作ろうと思いながら、回復魔法を発動させる。このゲームの回復魔法は、他のゲームと違って、一瞬で傷が回復したりしない。少なくとも、一分はかかる。また、回復魔法が「ケア」の一種類しか存在しないため、回復速度は「魔法攻撃力」に比例する。俺のケガの具合と「魔力攻撃力」を考慮すると、三分ちょぃは回復に時間がかかる。

「わかった。少し離れよう」

椿は言うやいなや、俺を抱え退却を開始。あぁ、女にお姫様だっこされる俺。なんて情けないんだ。

疾風。

何かが俺と椿の横を通り抜けた。見ると、弓を構えたプレイヤーが黒龍に突進していている。唯一、生き残ったプレイヤーのようだ。

黒龍から数十キロ以上離れたところで、椿が俺を座らせる。俺を避難させたらすぐさま前線に戻ると思っていたが、椿は俺を気遣っているのか離れない。

「あれ、ガジルじゃない？」

「たぶんな」

ガジルは機動力と射的力のみ強化している弓使いとして有名だ。バランスのいいステータスだと戦力にならないので、大抵戦闘スタイルにあわせた配分にポイントを割り振るのだが、ガジルのような思いきったパラメーターにする者は稀だ。ガジルの戦法は自慢の脚力にものを言わせ敵の攻撃を回避し、必殺の弓矢を撃ち込むというものだ。ガジルとは何回かクエストに挑んだことがあるから、その強さもよく知っている。

黒龍は前衛プレイヤーを葬った時と同様に右前足でガジルを払いのけようとするが、ガジルは飛翔し回避。そのまま弓を引き絞り、矢を放つ。俺の「稲妻」並みの速度で飛ぶ矢が、黒龍の右目に命中。矢が完全に見えなくなるまでえぐり込み、黒龍が絶叫。

弓矢や銃、投擲武器は、魔銃剣と同様に魔力による威力アップが可能だが、それらは魔法ほど攻撃力は高くない。が、ピンポイントで弱点部をつけば、絶大な威力を発揮する。殺傷能力は魔法よりも上と言っても、過言ではないのだ。

それでも、死なない黒龍。だが、致命的なダメージを与えたはずだ。ガジルは再び弓を構える。しかし、黒龍の左目がギラリと輝き、首がしなる。ガジルの攻撃が外れ、鎌のように曲がった黒龍の首が翻り、空中で身動きが取れない彼を襲う。黒龍の鋭利な牙がガジルの身体を噛み砕き、両断された下半身が地面に落下した。

「浩輝はここで休んでて！」

その凄惨な光景を前に、椿が動いた。それに気づいた黒龍が、口を広げ、椿に食らいつこうとする。椿はそれをかろうじで避け、がら空きの首に鞘から一瞬にして抜き出した「斬竜刀」を叩き込む。スキルの「抜刀術」を発動させたようだ。これは物理攻撃力を一瞬だけ数倍にするもので、椿が使うと、驚異的な威力を発する。

黒龍が悲鳴の彷徨を上げる。

椿の攻撃は黒龍の首を深く抉りはしたものの切断まではいかなかった。

…もうシャレにならない。まだ死なないなんて、ふざけすぎてる。

椿は再度「抜刀術」を使おうと「斬竜刀」を鞘に戻す。しかし、椿が居合いを放つ前に、黒龍が左前足を今までの比でない速度で振るい椿に打ちつけた。椿は物凄い勢いで飛ばされ、そのまま地平線の彼方へ消えてしまった。

最悪だ。椿までやられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8265t/

ドラゴンハンター

2011年10月9日03時46分発行